

ソール・ベロー作『ラヴェルスタイン』——1章1節——(翻訳)

Saul Bellow's *Ravelstein* (1-1): Translated from the English by Motoko Suzuki

鈴木 元子

Motoko SUZUKI

文化政策等部国際文化学専攻 Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

『ラヴェルスタイン』(二〇〇〇年)は、ソール・ベローの最後の長編小説である。日本ではまだ邦訳が出ていないために翻訳をはじめ、近い将来、一冊の訳本として出版する予定である。本稿は洋書の一章一節、すなわち一ページから一六ページまでの翻訳である。ページ数は初版のハードカバーでも最近のペーパーバックでも同じである。この小説の主人公エイブ・ラヴェルスタインは、ソール・ベローのシカゴ大学の同僚で、親友のアラン・ブルーム(一九三〇—一九九二年)がモデルといわれている。ブルームの著作『アメリカン・マインドの終焉——文化と教育の危機』は日本語に翻訳され、みずす書房から一九八八年に出版されて五万部売れたという。

Ravelstein is Saul Bellow's final novel. In Japan, unfortunately there is no translation for this book, which is part of the reason why I have started working. In the very near future my translation of Ravelstein in Japanese will be published. This time, I'd like to present a partial interpretation from page 1 through 16 of the first edition of Bellow's. The protagonist, Abe Ravelstein, is based on Prof. Allan Bloom, Bellow's best friend and colleague at the University of Chicago, and author of *The Closing of the American Mind*. Bloom's Japanese version had sold 50,000 copies in Japan.

人類に恩恵を施す人は大衆を楽しませるべきだ、とは滑稽である。しかし、少なくともアメリカではよくいわれることなのである。国を統治したいと望む者は誰でも、国民を楽しませなければならぬ。南北戦争のとき、人々はリンカーンの面白い話に、愚痴をこぼしたけれども。おそらくリンカーンは、厳格な深刻さがどんなジョークよりも、ずっと危険だと察知していたのだろう。だが、批評家はリンカーンを軽薄だと言い、陸軍大臣は彼を「猿」とまで言い及んだ。

わが世代の精神や潮流を形成した批評家で、ふざけた輩として知られる人物に、著名なH・L・メンケンがいる。高校の友人で『アメリカン・マキユリ』を読んでいた者は、メンケンがそれをレポートしたとき、スコープス裁判(一九二五年の進化論裁判。通称モンキー裁判)については熟知していた。メンケンは、ウィリアム・ジェニングス・ブライアンと聖書地帯、および無知で独善的で過度に欺されやすいアメリカ中産階級に、毒舌を吐いたのである。スコープスを弁護したクラレンス・ダローは、科学とモダニティと進歩を代弁していた。ダローとメンケンにとって、反ダーウィニズムのブライアンは運の尽きた農場地帯の愚者であった。進化論の用語でいえば、ブライアンは生命の木枯れ枝でしかなかったのだ。彼の説く「銀本位制運動」など冗談でしかなかった。彼の古い議会雄弁術も同様だった。彼がががつがつと食べたネブラスカ大農園の夕食も、そのようなものだった。ブライアンの食事こそ彼の死を意味する、とメンケンは述べた。「特別な創造」(反ダーウィニズム)に関する彼の見解は、裁判でひどく嘲笑され、ブ

ライアンは百万年前の翼竜テロダクティルと同じように絶滅の運命をたどった——この思想の粗悪版がのちに——滑空する爬虫類が、飛んだりさえずったりする温血の鳥類になるのだという説に引き継がれていった。

私はメンケンからの引用で雑記帳をいっぱいにして、そのあとW・C・フィールズや、チャーリー・チャップリン、メイ・ウエスト、ヒュー・ロング、およびダークセン上院議員のようなふざけた輩やもじり屋さんの手記も加えていった。マキャヴェッリのユーモアのセンスについてのページさえあった。だが、民主社会の機知や自己皮肉に関する私の思索に、あなたがたを巻き込もうとしているのではない。心配しないでほしい。私の雑記帳はいつの間にか無くなって、本当によかった。もう二度と見たいとは思わないから。ただ、それらは少し長い脚注のように、ちよつと顔を出すかもしれない。

私はいつも、脚注が苦手だった。私にとって、巧妙もしくは意地の悪い脚注が、数々のテキストを救ってくれたが、今からまじめな主題について語るために、長い脚注(前口上)を記してみたのだ——さあ急いで、これからパリに移ろう、ホテル・クリヨンのペントハウスに。六月初旬。朝食時のこと。招待してくれたのは私の良き友人ラヴェルスタイン教授、エイブ・ラヴェルスタインだった。妻と私は同じクリヨンに滞在していて、下の六階の部屋に泊まっていた。妻はまだ眠っ

ている。私たちの下の階はすべて、マイケル・ジャクソンとその取りまき連中に、目下占有されている(このことが絶対に関係しているというわけではないが、なぜか言及を控えるわけにはいかない)。どこかのパリの大ホールで、毎晩ショーを開いているのだ。まもなくフランス人のファンが大勢押しつけてきて、顔を上げると、いっせいに「ミール・ジャクソン」と叫びだすことだろう。そして、警察のパリアが、ファンを押し返すのだ。ホテルでは六階から、大理石の階段の吹き抜けを見下ろすと、マイケルのボディガードたちが見える。そのひとは、『パリ・ヘラルド』新聞のクロスワードパズルを解いている。

「素晴らしいじゃないか、このポップサーカスと一緒にするのは？」とラヴェルスタインが言った。今朝、教授はとても幸せそうだった。これまでこのスイートルームに泊まらせると、経営者側に圧力をかけてきたのである。パリにいるなら、クリヨンでなければ。一度くらい、お金をたくさん持って、ここで過ごしてみたい。ドラゴン・ヴォラント・ホテルのかび臭い部屋や、ドラゴン通りの何とかというホテル、あるいは医科大の真向かいにある聖ペール通りのアカデミア・ホテルにもうこりざりだった。クリヨンよりも荘厳で、豪華なホテルは存在しない。クリヨンは第一次世界大戦後の和平交渉のときに、アメリカ軍の幹部たちが宿泊したホテルだった。

「ずいぶんいいだろう？」と素早い仕草を交えて、ラヴェルスタインが言った。

確かに立派だ、と私は認めた。私たちの真下に、パリの中心街が広がっていた——オベリスクが置かれてあるコンコルド広場、オランジュリー美術館、議会、いくつもの壮麗な橋が架かったセーヌ川、それに幾つもの宮殿と庭園。もちろんこれらは目に麗しい風景だったが、今日はペントハウスからラヴェルスタインの主導で見ている、それも去年一〇万ドルもの負債を抱えていた彼が見せてくれている、このことの方がもっとすごいことだったのだ。多分、ずっとはるかに。彼は自分の「退職年金基金」(シンキング・ファンズ)について、私と冗談を言い合っていたからだ。

「僕はこれと一緒に沈んでいくな——この用語が金融界ではどういう意味か知っているかい、チック？」と彼は言うのだった。

「減債基金? 大体のことしかわからない。」

当時、ラヴェルスタインが金脈を掘り当てるまでは、彼にアルマーニのスーツや、ヴィトンの旅行鞆、合衆国では手に入らないキューバ

の葉巻、ダンヒルのアクセサリーや、純金のモンブランの万年筆、またはワイングラスのバカラやリリックのクリスタルが必要なのかどうかを質問する者は誰もいなかった。ラヴェルスタインは大柄な男で——大きいのであって、頑丈ではない——つまらない雑用をしなければならぬとき、彼の手は震えた。虚弱さから手が震えたのではなく、エネルギーが放出されると、それがとても大きく熱烈的なエネルギーであったために、彼を振動させたのである。

それで、友人や同僚、学生や崇拜者たちは、もはや彼の贅沢な習癖をサポートするために、支払いを肩代わりしないで済むようになった。ああ、ありがたや!、彼は今ようやくジェンセンシルバーやスポーツ、またはカンペールで、教員仲間と巧みな取引をしないでよくなった。これらすべてが過去のことになったのである。彼は現在、大金持ちだった。自分の思想を公けにしたのだ。彼はむずかしくても人気のある本

——熱意にあふれ、知的で、挑戦的な本を執筆すると、それが売れて、北半球でも南半球でも、赤道の両側でも、まだ売れていた。これが迅速に、だが真摯に行われたので、けちな譲歩も、大衆化もなく、メンタルなモンキービジネスもなければ、弁証学もなく、貴族的な雰囲気すらなかった。ウエーターがわれわれの朝食をセットしている間も、今ありのままに見えるのを当然のこととしていた。彼の知性が、彼を百万長者にしたのだ。考えたことをそのまま言い表し、それも自分自身の言葉で妥協せずに述べて、富裕になり、有名になることは案外むずかしいものだ。

今朝、ラヴェルスタインは紺と白地のキモノを着ていた。昨年、日本に講演に行ったときに、贈呈されたものだった。何が一番喜んでもらえるかと聞かれて、キモノがほしいと答えたのだった。この品は、シヨーン(將軍)にふさわしい特別注文だった。彼は、とても背が高かったからである。それでいて、とくに上品というわけではなかった。特大サイズのキモノに帯をゆるく締めたものだから、半分以上、はだけていた。脚は異常に長く、形が悪かった。下着がずり落ちて見えた。

「ウエーターの話だと、マイケル・ジャクソンはクリヨンの料理は食べないらしい」と彼が言った。

「お抱え料理人が彼と一緒にどこへでも、プライベートジェットで飛んでいくそうだ。それにしても、クリヨンのシエフは侮辱されたも同然だな。シエフの料理の腕はリチャード・ニクソンや、ヘンリー・キッシンジャーには十分で、イラン皇帝や国王たち、將軍や首相たちにも気に入られているというのに。ところが、この小柄でお茶目なサルミ

たいな男は、それを拒否する。聖書のなかに、征服者のテールブルの下に住み、テールブルから落ちるものを食べていた手足の不自由な王たちの話が何かなかったかな？」

「あつたと思う。そういえば、親指を切り取られていた(士師記一七)。」でも、どうしてそれがクリヨンやマイケル・ジャクソンと関係があるのですか？」

エイブは笑って、彼も確かではないと言った。ただ頭をよぎっただけだ。この辺りまで、ファンの若いパリっ子たちの金切り声が——いっせいに叫んでいる少女少女たちの声が——バスやトラックや、タクシートの騒音に混じって聞こえてきた。

この歴史的なシヨを、私たちは背景にしていた。コーヒを飲みながら、楽しい時間を過ごしていたのだ。ラヴェルスタインは意気揚々としていた。ところが、エイブの連れ合いのニッキーはまだ眠っていたので、私たちは小声で話していた。アメリカに帰ると、故郷のシンガポールから取り寄せたカンフー映画を、午前四時まで見るのがニッキーの習慣だった。ここでも、だいぶ夜更かしをしていた。ウエーターは、ニッキーの穏やかな睡眠が邪魔されないようにと、引戸を閉めた。私はときどき戸の格子から、彼のふくよかな腕と黒髪の長めのたばが動いてつやつやした肩まで届くのをちらりと見た。三〇代はじめのハンサムなニッキーには、まだ少年の面影が残っていた。

ウエーターが野イチゴとフリオッシュ、ジャムの瓶と、私が子どもの頃はホテル銀食器と呼ぶようにしつけられた小さなポットを持って入ってきた。ラヴェルスタインは小さなロールパンを口に入れながら、伝票の上に乱暴にサインをした。私はもっと作法よく食べる方だった。ラヴェルスタインが食べながら話をするのを見て、何か生物学的なことが起きていて、体に燃料を補給しながら、自分の考えに栄養分を与えているのだと感じた。

今朝彼は私に、私生活から出てもっと公衆のなかに入っていく、彼の言葉でいえば、「公的な生活、政治に」関心を持つようにとしきりに急ぎ立てた。私に伝記を書かせたがっていて、私はそうすることに同意していた。彼に請われるまま、一九一九年に起きたドイツの賠償金と連合国軍による封鎖の撤廃論争に関して、J・M・ケインズが書いた文書について、私はすでに短い記事を書いていた。ラヴェルスタインは、私のその文章を気に入ってくれたが、すごく満足しているという風ではまだなかった。私には修辭学的な問題がある、と彼は考えていたのだ。私は、文字通りの事実を強調しすぎると、その企画のより広範な興味を狭めてしまつたことになりかねないと言いつ返した。

思い出すと、高校生のときに、モーフォド(あだ名は「クレージー・モーフォド」という名前の英語教師に教わったことがあり、彼は私たちに、ボズウエルの『ジョンソン伝』に関するモーフォドのエッセイを読ませた。これはモーフォド自身のアイデアだったのか、それとも教育委員会が設けたカリキュラムのなかの一項目だったのか、今では不明である。モーフォドのエッセイは、ブリタニカ百科事典社が一九世紀に依頼したもので、現在ハリバーサイド・プレスによってアメリカの教科書版として出版されている。これを読んで、私はパール熱にかかってしまった。モーフォドは『ジョンソン伝』を彼なりに解釈して、ジョンソンの心の「曲折」にも触れたので、私を刺激したのである。それ以来、モーフォドが書いたビクトリア朝時代の行き過ぎに関する多くの真摯な批評には目を通すようになってきた。しかし、私は一度として癒やされたこともなければ——モーフォドに弱いという面を癒やそうと欲したこともない。彼のおかげで、かわいそうな痙攣性のジョンソンが道路のあらゆる街灯柱に触れたり、腐った肉や悪臭のするブディングを食べている光景が、今でも目に浮かんでくる仕方がないのである。

伝記を執筆するときに、どういう方針で書いていくべきかが問題になった。ジョンソンが記した友人リチャード・サベージのメモワールが、ジョンソン自身による伝記の原本といえた。もちろん、プルタークもいた。私がプルタークについてギリシャの専門家に言及すると、彼はプルタークを「単なる文人」にすぎないとけなした。しかし、『プルターク英雄伝』なしに、『アントニーとクレオパトラ』は執筆が可能だったのだろうか？

次に、私はオーブリーの『名士小伝』について検討してみた。

しかし、この本の全人物について、読み通すつもりはない。私はモーフォド先生について、ラヴェルスタインに説明しようとしたことがあった——クレージー・モーフォドは授業中、外目には酔っぱらっていないが、明らかに飲んでえらいしく、酔っぱらいのようになら顔をしていた。先生は毎日、同じ特価品のスーツを着てきた。彼は人のことについて知りたいとは思わなかったし、人に知られたいとも思わなかった。彼の気が滅入ってぼんやりしたアルコール含みの顔が、誰かに向けられることは決してなかった。その不揃いの眉毛の下で、壁の方だけを凝視すると、その目を今度窓から読んでいる本のなかへと移していった。モーフォドの『ジョンソン』とシエイクスピアの『ハムレット』が、その学期中、先生と一緒に勉強した二つの文学作品であった。ジョンソン博士は、彼の身におけるリンパ腺結核や見すばらしさ、浮腫にもかかわらず、友情関係を保ち、幾冊もの本

を執筆したが、それと同様、モーフォド先生も授業に来て、生徒が「この世の一切の営みはなんと、疲れはて、単調で、退屈で空しいのだろうか」(『ハムレット』第一幕第二場)と語らせたときには耳を傾けてくれた。ぞっとするほど短く刈り込んだ髪に、火のように真っ赤な顔、背中に組んだ手。すべてに活気がなく、美りなく見えた。

ラヴェルスタインは、私のこの先生の描写には、全く興味を示さなかった。なぜ記憶に残っているモーフォド先生について、彼に話をしようとしたのだろうか？ けれども、エイブが私にケインズのエッセイを紹介したのは的を射ていた。誰もが『平和の経済的帰結』の著者として知る大物エコノミスト兼政治家のケインズは、手紙と覚え書きをブルームズベリーの友人たちに送って、自分の戦後体験、とくに敗戦国ドイツと、同盟国指導者——ジョルジュ・クレマンソー(第一次世界大戦中のフランスの首相)、ロイド・ジョージ(第一次世界大戦中のイギリス首相)、およびアメリカ人——との間で交わされた賠償金をめぐる議論について報告していた。賛辞を惜しむような男であるラヴェルスタインが、今回私の書いたケインズの友人への短い手紙については、一流の記事だとほめてくれた。ラヴェルスタインは、フリードリヒ・ハイエクの方が、エコノミストとしてはケインズよりも上位だと格付けをしていた。彼によれば、ケインズは同盟国側の要求の厳しさを誇張して、ドイツの将官たちの、ひいてはナチの術中にはまってしまったのだと。ヴェルサイユ平和会議(講和会議)での処罰は、本来あるべきものより、はるかに軽減されてしまった。一九三九年のヒットラーの戦争の目的は、一九一四年のカイザー(ドイツ皇帝)のそれと大差なかったのだ。しかし、この重大なミスをおき置き、ケインズには非常に多くの個人的な魅力があった。イートン校とケンブリッジで教育を受けてから、ブルームズベリー学派によって、社会的かつ文化的に磨きをかけられた。当時の大国外交政治が彼を育成し、完璧にしたのだ。私が推測するに、彼は私生活において自分を天王星人(ウラニアン)——ホモセクシャルを表すイギリスの婉曲表現——と見なしていたのではないか。ラヴェルスタインは、ケインズがロシア人のバレリーナと結婚したと言っていた。また私に、ウーラノスはアプロディーテーを作り出した父親であったが、アプロディーテーに母親はいなかったと説明した。彼女は海の泡に宿ったというのだ。ラヴェルスタインがこのようなことを語ったのは、私がそれについて無知だったからではなく、定められたときのために私の考えをそこに向けておく必要があると判断したからであった。それで私に、ウーラノスがタイタン族のクロヌスによって殺されたとき、彼の種子(精子)が海にこぼれたのだ

と思い出させた。そして、これは何らかの形で、賠償金と、まだ封鎖されていたドイツ人たちがちょうどこのとき餓死しかけていたことと関係していた。

ラヴェルスタインは何か理由があつて、私にケインズの文書を読ませたのだが、彼はドイツの銀行家にフランスとイギリスの要求に応じる能力がなかったことを書いた文章をもっともよく覚えていた。フランスはドイツ皇帝の正貨準備金に下心を持っていて、金を直ちに引き渡すようにと要求していた。イギリスは、交換可能な通貨で手を打とうと申し出た。ドイツの交渉団のなかに、ひとりのユダヤ人がいた。腹をたてたロイド・ジョージは、この男の方に目を向け、びっくりするようなユダヤ人侮辱のおはこ——身をかため、背を丸めて、足を引きずっては、つばを吐き、うたた寝をして、尻を突き出し、ユダヤ人の歩行の特徴である扁平足のパロディー——をやらしたのだ。この全容がケインズによって記述され、ブルームズベリーの友人たちに送られた。ラヴェルスタインはブルームズベリーの知識人を良く思っていないかった。彼らの気取った風を嫌い、それにホモ気のあるふざけた仕草と、彼の言葉によれば「男性同性愛者のな振る舞い」を非難した。あの学派がゴシップに興じるからといって責めることはできないし、そうはしなかった。彼自身、ゴシップが大好きだったからである。しかし、彼が言うには、連中は思想家というよりはスノップで、おまけにその影響は有害だった。のちにイギリスで、GPU(ソ連秘密警察)や、NKVD(ソ連国家保安委員会)によって三〇年代にリクルートされたスパイたちは、ブルームズベリーによって育まれたも同然だったというのだ。

「それにしても君はよくやったよ、チック、ロイド・ジョージの汚らわしい『ウーラニオン・パロディー』について、うまく書いた。」
「ヨウベンとは「カイク」(「侮蔑語」「ユダヤ人」)を意味するフランス語だった。」

「ありがとつ」と私は言った。

「自分がちよっかいを出すとは、夢にも思わなかったが」とラヴェルスタインが言った。「だが、君にはちよつと恩返しをしようと思ってい

る、引き受けてほしい。」
無論、彼の動機については理解していた。私に、自分の伝記を書いてほしかったのだ。それと同時に、私を悪い習慣から救出したかったのだろう。隠遁している私はコミュニティに戻るべきだ、と彼は考えていた。「もう何年もずっと内省ばかりじゃないか!」と彼はよく言ったものだ。私は政治に——地元の政治でも、政治軍団による政治でも、

国政でもない、アリストテレスやプラトンが理解した意味での政治。私たちの性質に根ざしたものに——もつと接する必要があった。人は、生来の性分に背を向けることはできないものだ。私がラヴェルスタインに認めたことだが、ケインズに関する文書を読んだり、小作品を書くことは、まるで休日のようなものだった。人類に再度加わって、ヒューマンニティの浴槽に浸かること。ラッシュアワーに地下鉄に乗り、あるいは混雑した映画館に座する必要があるときもある——これがヒューマンニティ・バスということばで、私が意味したことである。家畜に定める塩が必要ないように、私にはときどき身体に触れ合いが必要なのだ。

「私には、ケインズと世界銀行、ブレトン・ウッズ協定、それにヴェルサイユ条約への彼の攻撃に関する観念が、まだうまく整理されていません。ケインズについては、その名前をクロスワードパズルに入れることくらいしか知りません」と私は言った。「あなたが彼のプライベートルな短い手紙に、私の注意を向けてくれてうれいす。彼のブルームズベリーの友人たちは、講和会議の印象を聞きたくてうずうずしていたに違いない。彼のおかげで、あのグループは世界的な歴史舞台のすぐ横に坐ったも同じです。リットン・ストレイチーとヴァージニア・ウルフは絶対に、内情を知っていないければならなかったのです。彼らは、英国社会の関心の高い層を代表していたから。彼らには知る義務があった——芸術家としての義務が。」

「それでこの件についてのユダヤ人側は？」とラヴェルスタインが尋ねてきた。

「ケインズはそんなに好まなかった。講和会議で、彼が唯一友好的だったのが、ドイツ代表団にいたユダヤ人だったことを覚えているでしょう。」

「ああ、あれらブルームズベリー学派の連中は、ロイド・ジョージのような並みの人間は好かんはずだ。」

しかし、ラヴェルスタインは人の集合体の価値については知っていたのである。自分自身のグループを持っていたわけだから。そのメンバーとは、彼が政治哲学を教えた学生たちであり、また長年の友人たちであった。その多くが、ラヴェルスタイン自身がダヴァール教授の下で訓練されたと同じように訓練されて、彼の難解な語彙を使っていた。ラヴェルスタインの昔の学生たちの何人かは現在、全国紙に載るような重要な地位に就いていた。かなりの者が国務省に就職していた。ある者は士官学校で講義をし、またある者は国家安全保障問題担当顧問のスタッフになっていた。ひとり、ポール・ニッツェの弟子になった。もうひとりは一匹オオカミで、『ワシントン・タイムズ』にコラム

を発表していた。ある者は影響力のある人物だったので、みんなに情報が行き届いた。それはひとつの親密なグループで、つまりひとつのコミュニケーションだった。彼らから、ラヴェルスタインは頻繁に報告を受けていて、在宅中も弟子たちとの電話に数時間を割いていた。しかも一応、彼らの秘密は守っていた。少なくとも、彼が名指しで誰かの話を引き合いに出すことはなかった。今日のクリヨン・ペン・ハウスでも、携帯電話が彼のむき出しのひざの間に挟まっていた。日本製のキモノは、ミルクよりも青白い脚からはだけていた。坐ってばかりいるせいで、脛骨は長く、ふくらはぎの筋肉は切形で、ふくよかさに欠けていた。数年前に心臓発作をおこしたあと、複数の医者から運動を勧められて、彼が高価なスエットスーツと上品な運動靴を買ったことがあった。数日間、トラックの周囲を足を引かずして歩き回ってはみただものの、もうそれで断念した。フィットネスは苦手だったのだ。彼は自分の身体をまるで乗り物のように、それもグランドキャニオンの縁を最高速度で走るレースに参加したオートバイのように扱っていた。

「ロイド・ジョージには実のところ、さほど驚かないよ」とラヴェルスタインが言った。「ただの論争好きで、小物のアホだよ。三〇年代にヒットラーに面会すると、奴をやけに高く評価して帰ってきたのさ。ヒットラーは政治的指導者にとつては、理想だった。彼が達成されることを願うと、何でも達成されていった、それも即座に。ちよちよいのちよいだ。議会政治とはまったく異質だった。」いわゆる大國政治について、ラヴェルスタインが語るのを聞くのは楽しかった。彼はルーズベルトとチャーチルについても、頻繁にあれやこれやと推測していた。ドゴールには、たいそう敬意を払っていた。ときどき興奮もしていた。今日は、たとえば、彼はロイド・ジョージの「辛辣さ」について口を開いた。

「辛辣さは良いものです」と私は言った。

「言語の問題になると、ブリッツ（イギリス人）は私たちみんなに辛辣だ。とりわけ彼らの体力が弱って出血し出すと、言語が彼らの重要な資源のひとつになった。」

「言葉で自分の心のなかを開いていかなければならないハムレットの売女のように。」

はげた強力な頭の持ち主であるラヴェルスタインは、誇張気味の声明や、大問題、著名人について楽に話題にすることができ、また数十年、幾多の時代、数世紀についても軽くこなすことができた。しかしながら、彼は、古典と同様、メル・ブルックスのようなエンタテイナーにも精通していて、そしてトウキョウ・ディデスの大いなる悲劇からブルッ

クスが演じるモーゼまで、その得意とする範囲は広がった。「モーゼは十戒を携えて、シナイ山から降りてくる。神は二十戒をくださったというのに、イスラエルの子どもたちが金の子牛の周りでお祭り騒ぎをしているのを見て、そのうちの十戒がメル・ブルックスの腕から落ちてしまった」。ラヴェルスタインはこういう「キャットキルお笑い」が大好きで、その物まねの才能があった。

彼は、私が書いたケインズの素描記事に気を良くしていた。チャールがケインズのことを千里眼のような知性の持ち主と呼んでいたことを覚えていたし——エイブはチャールが大好きだった。エコノミストとして、ミルトン・フリードマンがほかの大半の人たちより秀でていたが、彼は極度の自由市場信奉者だったので、文化を利用する必要がなく、一方のケインズは文化的教養からくる知性を有していた。しかしながらケインズは、ヴェルサイユ条約に関しては大間違いをしでかし、そして、ラヴェルスタインがとくに優れた理解力を有し政治学については、まったくわかっていなかったのだ。

ワシントンにいるエイブの「親しい弟子や友人たち」が電話をかけてきて、いつも話中なので、私は、影の政府を操っている黒幕は彼に違いないと口走ってしまった。彼はそれを認めて、風変わりな性格は自分の方ではなく、私であるかのように微笑した。彼はこう言った——「この三〇年間、僕が教えてきた学生たちが、今だに頼ってきてね、それで電話で今もゼミが続行中というわけさ、日々ワシントンで対応に奔走している政策問題が、二〇年か三〇年前に勉強したプラトンやロック、あるいはルソーと、またはニーチェとでも、同じ立場で考えることができなのだ」。

ラヴェルスタインから好意的な意見を得ることはたいへん愉快なことだったので、元学生たちは継続して彼に連絡を取ってきた——今や四〇代の男性たちが、そのうちの何人かは湾岸戦争の実行に著しく関わっていて、時間単位の長電話になった。「こういう特別な関係が僕には重要だね——最優先事項だよ。」ヴァージニア・ウルフがドイツ賠償金に関するケインズの私的レポートを読むのと同様、ラヴェルスタインがダウニング・ストリート（ロンドン）やクレムリンで何が起きているのかを知る必要があったのは当然なことであった。多分、ラヴェルスタインの見解や意見はときどき彼らの政策決定に影響を及ぼしたのだろうが、それは問題にすることではなかった。重要だったのは、自分の昔の弟子たちの政治的教育の任を、どのような方法であれ、今も担っているということだった。パリにも、彼のファンがいた。フランスの国立高等研究院で彼のコースを受講していた人々も、モスクワ

派遣からちょうど帰国して、彼に電話をかけた。

そのうえ、セクシャルな交友関係と親密な秘密もあった。帰宅して電話を取る、広めの黒革ソファの横には、使い慣れた電子パネルが置いてあった。私には、それを操作するのは無理だった、ハイテク技術がなかったから。けれどもラヴェルスタインは、手先がぶぎつちょうでも、プロスベロのようにその道具を操作することができた。

それにしても、今や電話代について心配する必要がなくなった。

とはいえ、われわれはまだホテル・クリヨンの最上階にいたのだ。君には生来の素質があるよ、チック」と彼が言った。「君の話にもっとニヒリズムを入れなかつたのは本当に残念だが、虚無的なコメディや、笑劇を書いたセリーヌのようなものであるべきだったな。ある軽蔑された女が、ボーイフレンドのロビンソンにこう言う——『どうして、アイ・ラブ・ユー』って言うてくれないの？ あなたのどこがそんなに特別だって言うの？ あなただってほかの男と同じように立つんでしょ。クワ！（何！） チュ・ヌ・バンド・パ？（立たないの？）』彼女にとって、立つことはラブと同義なのだよ。ところが、ニヒリストのロビンソンはひとつのことだけには高潔で、本当に大切な、ほんのわずかなことについては嘘をつかないという主義だ。彼はどんな猥せつ行為をも試すだろうが、最後には一線を画す、そしてこの深く侮辱されたあばずれ女は彼を撃ち殺してしまう、『アイ・ラブ・ユー』と言うてくれないから。』

「セリーヌは、これで彼は本物の男だと言いたいのでしょうか？」

「作家は人を笑わせたり、泣かせたりするものだ、という意味だよ。これこそ人類が探しているものさ。このロビンソンの状況は中世の演劇の再演で、中世劇でもっとも悪い、見捨てられた犯罪者が聖母になつたりするのだ。だが、ここに不調和はみられない。君がケインズについて書いたように、僕についてももっと大きなスケールで書いてほしい。それに、君はケインズに対しては、筆致が優しすぎた。僕は、それはお断りだ。僕については、好きだけ辛口であってほしい。君は自分が思っているほどの寵児ではない、それで僕のことを書くこと、おそらく自己を解放することになるだろう。」

「具体的に、何からですか？」

「何であるつと、君をコントロールしているものからだよ——『タモクレスの剣』²が君の上に吊されている。」

「いいえ」と私は言った。「それは、デイル・ウィトクレスの剣です。」この会話がもしレストランでの会話なら、食事の客たちは、われわれがセクシーな冗談を言うてめちやくちや楽しい時間を過ごしてい

ると思つたことだろう。「デイムウイトクレス」³とはラヴェルスタインのある種ギャグだったので、彼はピカソの『ゲルニカ』の後ろ足で立つ傷ついた馬のように笑った。

ラヴェルスタインの私への遺産は被写体であつた——彼は、私に被写体を、おそらくかつて私が持った被写体のなかで最上のものを、おそらく唯一本当に大切なものを与えようと考えてくれた。けれども、そのような遺産が意味するのは、私よりも先に彼が死ぬということだつた。もし私の方が、彼より先に死んでしまつたら、彼は私の伝記などきつと書かないだろう。葬儀で読んでくれる弔辞がページを越すなんてことも、考えられないことだつた。しかしそれでも、われわれは大の仲良しで、これ以上の親しい友はなかつた。われわれが笑つていたのは死についてで、もちろん死はコミックな感覚を鋭敏にしてくれる。しかし、われわれが一緒に笑つたという事実は、同じ理由で笑つていたという意味ではない。あの本に注入されたラヴェルスタインのもつとも真面目な思想が、彼を百万長者にしたということが、本当に滑稽だつたのだ。資本主義の才能ある者が、思想と意見と教えからお金になる商品を作つたのだ。ラヴェルスタインは教師であつたことを、心に留めておいてほしい。彼は、自由市場を偶像崇拜するような保守主義者のひとりではなかつた。政治的な問題、道徳的な問題に関しては、自分自身の見解を持つていた。でも、私は彼の思想を提示しようとは思わない。何よりも今は、それはよそう。ここは、手短にすませたいから。彼は教育者だつた。一冊の本のなかに一緒に収められた彼の思想が、彼を法外な富裕者にした。お金が入ると、すぐにそのドルを使つた。ちようど今、次の五百万ドルの出版契約を斟酌しているところだつた。また、講演旅行の謝礼に、大金を請求することもできた。そして結局、彼は学者だつた。それに異議を唱える者は誰もいなかった。モダニティを複雑なまま捕らえて文字で表現すること、そして、それにかかる人間的犠牲を査定するには、学者でなければならぬのだ。社交的な場で、彼は気まぐれな変わり者かもしれないが、教壇に立てば、彼の議論がどれほど十分な根拠に基づいたものであるかを見ることができただろう。彼が何について議論していたかが、非常に明白になつた。大衆は高等教育を正当な要求（権利）と見なした。ホワイトハウスもそれに賛同した。学生たちは、「サバがたくざんいる海」のようだつた。三万ドルが、大学一年間の学費の平均金額になつた。けれども、学生たちはいつたい何を学んでいたのだろうか？ 大学は何事寛大になり、規律なども緩んでいった。初期の時代のピューリタニズムも消失していった。相対主義によって、サン・ドミンゴで正しいことがパゴ・パゴ

では間違いで、それゆえに絶対的なものはないと考えられるようになった。

さて、ラヴェルスタインは歓楽の敵でもなければ、恋愛に異議を申し立ててもいなくなつた。それどころか、「愛」を、ひよっとすると人類に与えられた最高の祝福だと考えていた。激しく恋い焦がれることのない人間のソウル（魂）はゆがめられたソウルであり、最高の善を奪われたソウルであつて、死にゆく病いに侵されていった。われわれに与えられていたのは、そのソウルを払いのけて、（生物静力学と生体力学の）緊張からは飲めや歌えの解放が大切であると強く主張するバイオロジカル・モデルだつた。私はここで、アリストファネスとソクラテスのエロチックな教え、あるいは聖書のなかの教えについて説明するつもりはない。その教えが聞きたければ、直接ラヴェルスタインのところに行かなければならない。彼にとつて、エルサレムとアテネは文明の双子の源だつた。でも、エルサレムとアテネは、残念ながら私の得意分野ではない。あなたにはそれらとつまくやつてほしいと願う。けれども私はもう年寄りで、ラヴェルスタインの弟子にはなれなかつた。現在述べるべきは、ホワイトハウスでも、そしてダウニング・ストリートでも、彼がとも真剣に受け入れられたということである。彼は、チェッカーズ（英国首相の田舎邸）では、サッチャー首相の週末の客になつた。大統領も彼を無視しなかつた。レーガン大統領にディナーに招かれ、ラヴェルスタインは正装するのに、つまりタキシードの下に巻くサッシュベルトやダイヤモンドのカフスボタン、エナメル靴に大金を費やしたのだ。『デイリー・ニューズ』のコラムニストは、ラヴェルスタインにとつてお金とは、スピードを出して走っている列車の後部からばらまくもののように書いた。ラヴェルスタインは大笑いして、その切り抜きを私に見せてくれた。その間中ずつと、大いに面白がつていた。もちろん私には面白がる同じ理由はなかつた。彼に降つてわたつたような幸運が、まだ私には訪れていなかったからな。

私の方がラヴェルスタインより、何歳も年上だつたが、われわれは真の親友だつた。彼同様、私の性格にも未熟な要素があつたので、それで地面は平らにされて、対等になつた。私のことをよく知っている人が言うには、私はどんな大人よりもお人好しなのだぞうだ。ナイーブであることを選んだかのように。でも事実は、極端に世間知らずの人間だつて、自分の得することくらいは知っているものだ。ものすごく純朴な女性だつて、もう限界だと言つて、むずかしい夫とけじめをつける時期が何時かくらいは知っている——ふたりの未払い勘定から、お金をいつ移動するかについても知っている。私は自己保存について、

特別の注意を払ってきたわけではない。しかし、幸運にも——あるいは運が良すぎるといっわけではないだろうが——今は打ち出の小槌の「時」で、すべての文明国にとって豊穡の時代である。物質的な側面について言えば、巨大な人口が飢餓や病気から上手に守られてきたとは言いがたい。そして、この生存のための闘争から部分的にのみ解放されるのだが、人々をナイーブにする。それで、人々の切望しているファンタジーが野放しになっていると言っているのである。定式化されていない協定に基づいて、ほかの人たちが自己を表現するのに使ってきた用語、いつも改ざんされてきた用語を、あなたはしだいに受け入れるようになる。あなたは、あなたの批評力を鈍化させる。あなたは自分の抜け目なさを抑える。そして、知らず知らずのうちに、お金に関することは何もわからないおめでたい人間だと繰り返し宣言していたはずの女性に、途方もない離婚調停金を払うことになるのだ。

ラヴェルスタインのような男性に近づくには、少しずつ進むのが多分最善なのだろう。

注

- 1 プルタークは帝政ローマのギリシャ人で、著作に『対比列伝』(英雄伝)がある。
- 2 繁栄のなかにも常に身の危険があるという故事。
- 3 デイムワイトは「ばか、うすのろ」の意味。

※翻訳するにあたり、原文の文体の特色を生かして、長文は長文として訳したために、日本語としては句点であるべきところに読点を打っている場合がある。ご了承いただきたい。

また原文中のフランス語はそのまま邦訳せずに、英文のなかのフランス語であることを示す意味からも、発音をカタカナ表記にしている。翻訳の許諾を得ていることを、ここに付記する。